保育内容（健康領域）における「豊かな人間性」

――主に昭和39年と平成元年告示の幼稚園教育要領の比較から――

村　田　　務

1、はじめに

1)「人間性」への関心

幼稚園教育要領が10年ぶりに改訂され（平成10年12月14日告示）、平成12年4月1日から実施される運びとなっている。今回の改訂における大きなテーマは「生きる力」である。これは、中央教育審議会（中教審）の答申[1]「『ゆとり』の中で子どもたちに『生きる力』をはぐくむことを理念としつつ、形式的な平等の重視から個性の尊重への転換を目指す」等を受けたものである。

この「生きる力」について、中教審の第一次答申は、全人的なものであると規定し、次の３つの面を挙げている。

① 自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力。あふれる情報の中から自分に必要な情報を選択し、主体的に自分の考えを築き上げていく力。

② 美しいものや自然に感動する心といった柔らかい感性。良い行いに感銘し、間違った行いを憎むいった正義感や公正さを重んじる心、生命を大切にし、人権を尊重する心など基本的な倫理観。他人を思いやる心や優しさ、相手の立場になって考えたり、共感することのできる温かい心。ボランティアなどの社会貢献の精神。

③ たくましく生きるための健康や体力。

これらは、「自ら学び自ら考える力」「豊かな人間性」「たくましく生きるための健康や体力」と要約することができる。この中で、「豊かな人間性」は、子どもたちが身につけるべき「生きる力」の核となるものである[2]。

なお、「豊かな人間性」については、中教審の「新しい時代を拓く心を育てるために（中間報告）」においても触れており[2]、上記の内容の他に「自立心、自己抑制力、責任感」「他者との共生や異質なものへの寛容」を追加している。

このように、今日の教育において「豊かな人間性」についての関心が高まっている。しかし、「人間性」という表現は、「今回の改訂がはじめて」というわけではない。我が国の戦後教育は経験主義から科学主義、科学主義から人間主義へと推移しており、その中で、1977年の学習指導要領改訂でも「調和のとれた人間性豊かな児童・生徒を育てる」という表現がみられる。こうした流れの中で、あえて「豊かな人間性」を核として挙げていることは、今日、「人間性」の重要性がより高まっているとも捉えることができる。

2）研究の目的

そこで、本研究では、幼稚園教育の保育内容（健康領域）において、「豊かな人間性」がどのように取り扱われているかを検証するために、幼稚園教育要領（主に昭和39年告示と平成元年告示）の記述内容を比較分析する。

3）豊かな人間性とは

「豊かな人間性」について、幼稚園教育要領の記述内容を比較分析するにあたって、まず、「人間性」とは具体的どういうことなのか、キーワードとしてどのような言葉が挙げられるかについて明らかにしておく必要がある。

「人間性」に関わる言葉として、ヒューマニズムがある。ヒューマニズムを「人間として発達していくことのゆがみを見つめる態度」と捉える考え方がある。しかし、「人間として」について、どう規定するかが前提となり、堂々巡りである。栗田[3]は、ヒューマニズムを、建学の理念としている本学でさえ、自明とはなっておらず「『無風地帯』から引きずり出して、緊張を持ち込み、理念として鍛えていくこと」が必要であると述べている。「人間性」についての規定の困難さ、多様性を示している。

ここでは、中教審と田浦[4]の「人間性」の規定をもとに、「人間性」に関わるキーワードを仮説的に設定し、幼稚園教育要領の比較分析を試みる。

田浦は、人間的教育の要素として次の７つを挙げている。

① 民主的価値観　：人間の福祉、人類の繁栄への献身、経済優先や環境破壊より人類共存
② 豊かな感情　：思いやりや隣人愛、知識主義や競争より共同
③ 不屈の意志　：各要素を支えるもの
④ たくましい健康：各要素を支えるもの
⑤ 確かな知識　：教育的価値、境界・学際領域、総花的知識や記憶知識より学び方
⑥ 道徳的実践力　：生命尊重、問題解決の仕方、対人関係
⑦ 創造的態度　：画一化した思考パターンより創造的な知識、芸術・倫理
自発性・主体性・構想力・想像力・柔軟性、
創造的環境、創造的価値観

中教審は、豊かな人間性について次の６つを挙げている[2]。

① 美しいものや自然に感動する心といった柔らかい感性
② 正義感や公正さを重んじる心
③ 生命を大切にし、人権を尊重する心など基本的な倫理観
④ 他人を思いやる心や社会貢献の精神
⑤ 自立心、自己抑制力、責任感
⑥ 他者との共生や異質なものへの寛容

ここで、人間の特徴として、第一に「人間は、外界に対して能動的に働きかける存在であること」、第二に「人間は、社会的存在であること」を仮定してみる。そして、上記の要

素と考え合わせて、「人間性」に関わるキーワードを設定すると、以下のキーワードが導き出される。すなわち、「主体性」、「創造性」、「自己概念」、「人と人との関係性」、「個性尊重」、「人権尊重」である。本研究では、これらのキーワードを用いて幼稚園教育要領の比較分析を試みることにする。

2、ねらいについて（表１参照）

1）心の健康

２つの幼稚園教育要領（以下要領）で大きく異なるのは、健康の捉え方にある。昭和39年告示の領域「健康」では、体に関する健康を中心に扱っていた。しかし、平成元年告示では、体の健康に加え心の健康を合わせて捉えている。つまり、身体面の健康だけではなく、精神的な健康面にも配慮している。

その結果、ねらいの第1項目に「明るく伸び伸びと行動し充実感を味わう」が付け加えられた。健康の心情面を重視した捉え方であり、生きることへの幸福感や充実感など「自己概念」という観点から評価できる。なお、ＷＨＯの「健康の定義」で示される「健康の社会的側面」については、主として領域「人間関係」のなかで取り扱われる。

表１　幼稚園指導要領における健康領域（ねらい）

昭和39年	平成元年
	明るく伸び伸びと行動し充実感を味わう
健康な生活に必要な習慣や態度を身に付ける	健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身ける
安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける	
いろいろな運動に興味を持ち、進んで行うようになる	自分の体を十分に動かし、進んで運動しよとする

2）習慣形成とその理解

保健、安全面に関しては、両告示とも「生活に必要な習慣や態度を身につける」として一貫している。理解という知的側面については触れられていない。習慣形成を重視する指導は、知的理解の伴わない「押しつけ」的指導になりやすいことが危惧される。特に、昭和39年告示の留意事項では「繰り返し指導」することが強調されている。

習慣化された行動は、ある一定の環境のもとでは無条件に「意識されず」実行されるという特徴をもつ。健康行動に対する動機づけの省力化という点では優れている。

しかし、その習慣化された行動が望ましいものであったとしても、周囲の雰囲気や環境が変わることで崩れてしまうことが多い。また、反対に、理解の伴わない習慣は、周りの条件が変化して望ましい行動ではなくなったにもかかわらず、無批判に実行され続けることもある。

自分の行動について自ら考えること、自己決定することは、個性尊重の原点であり、「ひととして生きる」ための基本といえる。保健行動や安全行動、さまざまな運動、身体活動の意味について理解していけるような、発達段階に即した指導が望まれる。

3）いろいろな運動

体育に関しては、両要領とも「進んで運動しようとする」ことでは同じであるが、昭和39年告示では「いろいろな運動に興味をもち」とあったものが、平成元年告示以降では「身体を十分に動かし」に変わっている。

運動体験の捉え方が「量」から「質」に変わっているとも言える。子どもの運動不足という現実問題に配慮したことや、十分に体を動かすことでの「喜びや充実感の体験」に配慮したものと捉えられる。

しかし、幼児期の発育発達には、多様な運動経験が必要であることや、幼児の個性や興味を重要視するという観点からは、「いろいろな運動」という記述がなくなったことは、「後退した」と言わざるを得ない。

なお、平成元年告示の内容項目には「いろいろな遊びの中で」という記述がみらる。しかし、この「いろいろな遊び」は「多様な運動経験」を重要するというよりは、39年告示で7つあった「遊び活動」を1項目にまとめた結果の記述であると言える。

4）自らつくりだす力を養う

平成元年告示では、領域「健康」全般をみる上での観点が、「ねらい」の前段に示されるようになった。「自ら健康で安全な生活をつくりだす力を養う」である。自主性、主体性、創造性の発達を強調している点で望ましい。

3、内容について（表2参照）

1）個人差や個性、心情面の重視

平成元年告示では、内容項目の記述法が、具体的「到達内容」記述から「包括的内容」記述にしたことにより、その項目数が大幅に減った。昭和39年告示では、保健に関して10項目、運動に関して9項目、安全に関して5項目である。

平成元年告示では内容項目が精選されて、順に4項目、3項目、1項目となり、新たに、心の健康、「安定感」として捉えられる項目「様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む」が1つ加わった。

「包括的内容」記述にし、あえて、すべての子どもを対象にした具体的「到達内容」を示さないことで、子どもの個人差や生活環境の差異を考慮したものと読みとれる。また、特に運動面では、このことにより、子どもの活動に対する評価基準を「結果」よりも「取り組み」、意欲や態度、体験した活動そのものを重視する考え方が示された。個人差や個性、心情面の重視という点から評価できる。

2）興味・関心の重視

平成元年告示では、「十分に体を動かす」「楽しんで取り組む」の記述が付け加えられた。このことは、子どもの興味・関心が基本となる。「十分に体を動かす」「楽しんで取り組む」ために、保育者は、子どもにどのような支援をし、どのような環境を設定するかが鍵となる。

一方、そのねらい（「十分に体を動かす」「楽しんで取り組む」）を達成するためには、子

表２　幼稚園指導要領における健康領域（内容）

昭和39年	平成元年
だれとでも仲よくし、きまりを守って遊ぶ	先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する
いろいろな方法で、歩く、走る、とぶなどの運動をして遊び	いろいろな遊びの中で十分に体を動かす
いろいろな方法で、投げる、押す、引く、あるいはころがるなどの運動して遊ぶ	
かけっこ、とびっこ、なげっこ、ならびっこなどをして遊ぶ	
鬼遊びなど集団的遊びをする	
すべり台、ぶらんこなどで遊ぶ	
ボール、綱、箱車などを使って遊ぶ	
のびのびとリズミカルに運動する	
いろいろな運動器具の使い方を知り、くふうして使いまた、あとかたづけをする	
なるべく戸外で遊ぶ	進んで戸外で遊ぶ
	様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む
休息の仕方がわかり、運動や食事のあとは静かに休む	健康な生活のリズムを身に付ける
身体、衣服、持ち物、身近な場所などを清潔にする　不潔なものを口に入れず、ハンカチ、手ぬぐいなどは自分のものを使う	身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄など生活に必要な活動を自分でする
食事の仕方を身につけ、食べ物の好ききらいをしない	
便所をじょうずに使う	
身近な場所などを清潔にする（再掲）	幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整える
健康診断、予防接種、病気やけがの治療をいやがらずに受ける	自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う
伝染病やその他の病気について関心をもつ　姿勢を正しくする	
適切な服装で遊びや仕事をする	
けがをしないように気をつける	危険な場所、危険な遊び、災害時などの行動の仕方がわかり、安全に気を付けて行動する
安全に気をつけて遊具や用具を使う	
危険なものに近寄ったり、危険な場所で遊んだりしない	
交通の規則を守る	
災害など非常のときに、先生のさしずに従って行動する	

どもが体験する「遊び」や動き、身体活動について、ある程度の「技能」や「技術」というものが伴う必要がある。そうでないと本当の意味での「十分に体を動かすこと」や「楽しむこと」はできなくなる。子どもの興味や関心に基づいた、より効果的な「技能」や「技術」の指導が課題となる。

ここでは、十分に体を動かしたり、運動遊びに楽しんで取り組むことを通して、自ら心の安定感や充実感、存在感を感じ取るように期待している。

3）主体性・自発性の尊重

平成元年告示では、「自分でする」「自分たちで生活の場を整える」ことが強調された。このことは「自立させる」という捉え方より、子どもの主体性や自発性を尊重したという捉え方の方が妥当であろう。人間の「外界に対して能動的に働きかける存在である」という視点に立った保育内容であろうと推測される。

4、指導上の留意事項について（表3参照）

1）　ストラテジーと心情面の重視

留意事項に関しては、昭和39年告示では、保健、安全、運動の3分野について、それぞれ各分野ごとに記述があるのに対して、平成元年告示では、「健康」領域の全体を包括しての留意事項が示されている。

ねらいを達成させるための機械的なストラテジーではなく、「暖かい触れ合い」や「体を動かすことの楽しさを味わい」など、心情面を重視した、子ども中心の、或いは子どもの自発性を配慮した指導アプローチといえる。

表3　幼稚園指導要領における健康領域（留意事項、抜粋）

昭和39年	平成元年
年齢や発達の程度に応じて、季節や時期などを考慮し・・・基礎的な習慣や態度を繰り返して指導し、身につけさせるようにする	幼児が教師や他の幼児との暖かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として心と体の健全な発達を促すこと
幼児の興味や能力に応じ、・・・いろいろな種類の運動をのびのびと積極的におこなわせ、身体機能の調和的発達を促す	生活の中で興味や関心、能力に応じて全身を使って様々な活動に取り組むことにより、体を動かすことの楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること
社会の領域に示す事項の指導とあわせて、公衆衛生について関心をも呼び起こすようにつとめる	幼児の生活と遊離した特定の運動に偏った指導を行うことのないようにする
（健康、運動）に関する事項の指導にあたっては、幼児の経験や活動がいずれか一方にかたよることのないように指導する	

2）自己の存在感と充実感

平成元年告示では、「自己の存在感と充実感」が示された。子どもの能動的な活動のためには自信をもつことが必要であり、存在感と充実感が前提となる。他者との暖かい触れ合いや十分に活動することの重要性が別記されている。こうした環境を、どのように整え、そして、どのようにして設定していくか、が重要となる。

3）「繰り返して身につけさせる」から「育つようにする」へ

運動習慣や健康習慣を重視する考え方では、「繰り返しの指導」の不可欠となる。そして、その背景には、子どもの「能動的存在」を軽視する捉え方がある。子どもを「能動的存在」として捉えるとき、子どもの「能動的存在」をどのようにして支えていくか、育てるか、そして、それらが発揮できる環境をどのように設定していくか、が課題となる。昭和39年告示の「繰り返しの指導」から、平成元年告示の「育つようにする」の変更は、「能動的存在」を重視した考え方として評価したい。

5、平成元年と平成11年告示幼稚園教育要領の比較

両告示の間で「ねらい」と「内容」の項目において違いはない。一方「留意事項」では、平成元年告示で2項目であったものが、平成11年告示では2項目が新しく追加され4項目になった。また、第二項目目の一部に追加記述があった。以下、両告示の「留意事項」の項目について比較する。なお、平成11年告示から「留意事項」は「内容の取り扱い」に変わった。

1）安全面・生命尊重

平成11年告示では、第二項目に「安全について心構えを身につけ、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること」の記述が追加された。また、新しく追加された第三項目には、「幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること」という記述が見られる。両記述を考え合わせると、体の大切さや命の大切さ（生命尊重）を強調した記述内容といえる。

2）心の健康

平成11年告示では、第三項目に、「自然の中で伸び伸びと体を動かして遊びことにより、・・・、幼児の興味や関心が戸外に向くようにすること」が追加された。身体諸機能の発達をねらうとともに、精神面の健康、「ストレスへの対処・解消」にも留意した記述とも読み取れる。

3）主体性と習慣形成

平成11年告示では、第四項目に「基本的な生活習慣の形成に当たっては、幼児の自立心を育て、幼児が他の幼児とのかかわりながら主体的な活動を展開する中で、生活に必要な習慣を身につけるようにすること」が追加された。「自立心」「他の幼児とのかかわり」「主体性」を強調することは、「人間性」という観点から望ましいものである。

一方、「内容の取り扱い」において、新たに「生活習慣の形成」を追加し強調することは、主体的な自己判断能力を結果として軽視するように捉えられる。前述したとおり、無意識的な「生活習慣」にもとづく生活行動は、時として健康問題を引き起こすことがある。健康的な生活習慣は、健康的な自己判断に基づくことを前提とする。また、「生活習慣の形成」を強調するために主体性が阻害される危惧も感じられる。「主体的な思考や判断にもとづいた生活習慣を育てる」が望ましい。

6、まとめ

「健康」に関する保育内容における「豊かな人間性」を検証するために、主に昭和39年告示と平成元年告示の幼稚園教育要領（健康領域）について検討した。その結果、平成元年告示の幼稚園教育要領では、「主体性」、「豊かな心情」、「個性尊重」等の点が強調されており、「人間性」という観点から見て、より望ましい保育内容となっている。

一方、「主体性や個性」と「社会性」との関係に関する保育内容については特に強調して記述はされていない。社会的存在としての人間を前提として、集団の中でその個性や能動性をいかに発揮するか、子どもたちをどう育てていくか、が重要である。こうした点から、平成元年告示の幼稚園教育要領においても、第二の「人間性」の観点「人間は、社会的存在である」と言う点では今後の課題となっている。

平成11年告示幼稚園教育要領では、「安全面・生命尊重」「心の健康」という点では、「豊かな人間性」にそった記述内容であったが、「習慣形成」を強調するあまり「主体性」の重視という点で曖昧さが残った。

本論文の作成に当たり、本学教育・福祉センターより平成10年度研究助成を受けた。

むらた　つとむ（健康教育学）

参考文献

1）中央教育審議会（1997）：21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第二次答申）.
2）中央教育審議会（1998）：新しい時代を拓く心を育てるために（中間報告）.
3）栗田廣美（1998）：「ヒューマニズム」は自明な価値か、白梅学園短期大学教育・福祉研究センター研究年報No.3.
4）田浦武雄（1985）：学校の人間化、明治図書.
5）村田務、内山源（1979）：学校保健教育における習慣形成目標の検討、健康教室、東山書房.